

「第 19 回中部 NGO-JICA 中部地域協議会」議事録

(以下、敬称略)

平 山： それでは定刻となりましたので、第 19 回中部 NGO-JICA 中部地域協議会を始めさせていただきます。

私は JICA 中部の山本さんと一緒に司会を務めます名古屋外国語大学教員の平山と申します。皆様どうぞよろしくお願いいたします。

今年度も昨年度と同様にオンラインと対面を組み合わせたハイブリッド開催となっています。画面共有もさせていただいていますが、あらかじめいくつかお願いしたいことがあります。最初に会場参加の方は会場のマイクで発言をいただきます。そしてオンライン参加の方は発言するとき以外は、マイクをオフにさせていただきますようお願いいたします。オンラインの方は可能でしたらカメラをオンにしてご参加ください。ただし通信事情や接続に問題がある場合にはカメラオフでも構いません。

そして 2 点目のお願いです。オンライン参加の皆様は所属団体・氏名の表示の統一にご協力をお願いいたします。

3 点目です。後日、JICA 中部のウェブサイトにて議事録を公開いたします。議事録作成のために録画をしておりますのでご了承ください。

最後です。ご質問・ご意見が進行中である方は、チャットへの記載ではなくマイクをオンにして直接ご発言いただければと思います。また、その次にご発言されたい場合には挙手ボタンを押してください。皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

それではこの後は議事次第に沿って始めさせていただきます。

最初に開会のご挨拶を JICA 中部の上町所長にいただきたいと思います。

上 町： 皆さんこんばんは。JICA 中部センター所長をしております上町透と申します。こちらに去年の 4 月に着任をしてほぼ 1 年になろうとしております。その間、名古屋 NGO センターさんはじめ NGO の方々とは非常に多様な連携の機会がありまして、ほぼ 1 年勤めさせていただく中で心強く感じているところです。

草の根技術協力、JICA 基金活用事業といった JICA の事業をご活用いただいて連携を図るというタイプのものに加えて、NGO さんからご提案をいただいて行う提案型プログラム、そして国際協力のキャリアイベントとして行っている国際協力カレッジ、それから多文化共生の関係で行っている多文化共生パートナー育成講座、こうした NGO サイドのほうから自主的にこの場を活用いただいて取り組んでいただくものに我々も協力させていただくタイプのものまで、非常に良い形での連動が動いていると心強く感じております。

今の国際情勢のことを考えますと、市民社会との連携がますます大事になっていて、一つ一つの事業について効果を最大限にすることと、実行から学ぶことが非常に重要になっております。その意味でも一層、連携が重要になるところかと思えます。

本日は各種報告事項の後、協議事項としてコレクティブインパクトをテーマ設定としていただいております。こちらは非常に時宜にかなったものだと思います。私もしっかり議論に参加させていただきたいと思えます。

本日はこの後 2 時間ですけれども、実りある時間となるよう私どもも努力してまいりたいと思えます。皆さまどうかよろしくお願いいたします。

平 山： 上町様、ありがとうございます。この後は報告事項に移ります。司会を交替いたしまして JICA 中部の山本さんをお願いいたします。

山 本： ここから先、報告事項のセッションの司会を務めさせていただきます JICA 中部の山本と申します。よろしくお願いいたします。

私自身、JICA 中部に 7 月から勤務しております、6 月まで JICA のラオス事務所で勤務させていただいておりました。こうして皆さまにお会いするのは初めての方も多いかと思いますが、よろしくお願いいたします。

ではまず一つ目の報告事項です。国際協力カレッジ 2024 について、ご担当いただいている名古屋 NGO センターの村山さんからご報告をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

村 山： 皆さんこんばんは、名古屋 NGO センター事務局の村山佳恵と申します。どうぞよろしくお願いいたします。私の方から国際協力カレッジと NGO 等提案型プログラムについてご報告させていただきます。

まず国際協力カレッジについてご報告いたします。「国際協力を学び、行動するきっかけをつかもう！」と題して国際協力カレッジが開催されました。定員 70 名を大きく超える申し込みがありまして、高校生や大学生、社会人、退職された方まで幅広い参加者 82 名を得て開催しました。

参加者のうち全体の 50%が 10 代、それから 30%が 20 代と若年層の参加が多く、初めてカレッジに参加した方は全体の 97%でした。12 月の開催ということもありましてインフルエンザの拡大の影響で少しキャンセルがありましたけれどもおおむね盛況に終わりました。

1 時間目には国際協力分野でキャリアを築く 3 名がこれまでの人生の歩みや国際協力に関わる仕事の喜びや難しさをテーマに登壇しました。ゲストはご覧の 3 名です。松浦さんからは、NGO スタッフになりたい人のためのコミュニケーションカレッジに参加したことが、現在の仕事に繋がったことなどを共有していただきました。また、木村さんからは、前職の障害者福祉で働いた経験、現職での仕事で大変だったこと、嬉しかったことをお話ししていただきました。佐藤さんからは

学生時代の国際交流や留学経験を経て現職に繋がったことですか、現在の JICA でのお仕事や海外駐在経験についてご紹介をいただきました。

これら 3 人の先輩が参加者からの質問にお答えをしました。「NGO で活動する場合、研修を受ける機会がありますか？」というご質問ですとか、「現地で英語が通じない場合、どうしていますか？」それから「中学生の時にやっておいた方がいいことを教えてください。」「働きながらできるボランティアありますか？」などといったご質問に丁寧にお答えいただきました。

そして 2 時間目、3 時間目です。国際協力ボランティアインターンマッチング展と題してご覧の 10 団体がブースを出展して報告しました。

各団体からアピールタイムを行いました。持ち時間は各 3 分、それぞれ自団体の活動について熱く楽しくご紹介をいただきました。参加者は興味を持ったブースに回って直接スタッフから話を聞いて、自分に合ったボランティアやインターン先を見つけるための情報収集を行いました。

参加団体の一つから、参加者がカレッジの翌週には「もう NGO の事務所を訪問してくださいましたよ。」とご報告をいただきました。学んで終わりではなく行動に結びついているカレッジです。

参加者の声を抜粋してご紹介をいたします。全部を読み切ることはできませんが、少しご紹介しますと、「3 人の方がそれぞれどのような道を歩んできたのか、どんな思いで今の活動されているのかがよく分かりました。」「今まで知らなかったこと、興味のなかったことについて知るきっかけになりました。」「講師や参加団体だけでなく、参加者の熱意も伝わってきて、自分も何かできることをしようという気持ちが強くなりました。」などといった前向きなコメントを多く寄せていただきました。

ここで国際協力カレッジの終了後に当日の動画を SNS で配信しましたのでこちらの動画をご覧くださいと思います。(動画を投影。)

ご視聴ありがとうございました。

それでは、続きまして NGO 等提案型プログラムについてご紹介します。会場参加の方にはチラシをお渡ししております。こちらをご覧くださいつつ、画面を両方見ながらお聞きいただければと思います。

「あなたの挑戦をサポートする NGO 研修～持続可能な運営への第一歩～」としまして、昨年の 8 月からおよそ 8 ヶ月間のプログラムで実施をしているものになります。8 ヶ月間で A から D の 4 つの講座に参加していただいて、自団体の課題を解決する取り組みにチャレンジする内容になっています。定員の 30 名を大きく超えるお申し込みをいただきまして、愛知県周辺だけでなく、西は沖縄から、それから北は新潟から、そして遠く南はフィリピンなどから、計 63 名の幅広いご参加を得ました。対面及びオンラインで開催をしているものになります。

現在すでに A と B の講座を実施済みです。

A の講座をご紹介します。CR ファクトリーの呉さんに講師として登壇をしていただきまして、呉さんから非営利組織の難しさの理由とその正体を知っておくことがとても重要であること、メンバー間の温度差と多様性が広がりすぎることで、これを解消するには愛着とかコミュニティが鍵になってくる、コミットメントに応じて関わり方のグラデーションをつけること、等お話しいただきました。他にもたくさんエッセンスをいただき、画面でご紹介をさせていただきました。

続きまして B の講座では 4 人の講師の方にご登壇いただき進めました。

テラ・ルネッサンスの鬼丸さんからは、私たちの原点はほっとけないという気持ち、今苦しんでいる人を助けるためには社会構造の変化が必要だと、市民の意識変革のために「仲間を増やすことは事業を実施することと同じくらい大事」と教えていただきました。

また、アクセスの野田さんの方からは、組織を変えるためにしたことは議論と対話を使い分けることで、議論ばかりすることがしんどくなる人も組織の中にいるので、「今は議論する場」「ここは対話する場」と使い分けると、しんどさが軽減されるのではとご自身の体験について話していただきました。

そして Alazi Dream Project の下里さんからは寄付についてお話しいただきました。寄付の決定打は総合的で、継続的な関係が続くのは内発的動機を満たす感謝の循環が生まれたときに寄付が継続されると教えていただきました。

そして B の講座の最後に地元名古屋から DiVE.tv の牧野さんにご登壇をいただきまして動画について教えていただきました。動画の作成の重要性について特に文字や写真などといった従来の媒体との使い分けについて、また動画の作成方法について細かく教えていただくことができました。

こちら振り返りシートから参加者の声をご紹介します。「ワークを试着みることでメンバーそれぞれの仕事の分担がとてもクリアに見えてきました。」「温度差があることを前提に活動していると内部でのズレも解消できると思うのですがにでも取り入れていきたいです。」「自分の団体に置き換えられる話が多く、講師の現場での成功と失敗を自分の組織運営に反映させていきたいと考えました。」などといったコメントが寄せられています。

全てをご紹介できないのですが、A と B の講座はすでに終了しまして、現在は活動で抱える課題のシェアリングと組織強化につながる実践と伴走支援を進めています。

本研修のコースリーダーは坂茂樹さん。それからサブコースリーダーは松浦史典さんで、4 月 19 日に成果発表会を開催します。

2025 年度も同様の講座を開催する予定です。ご関心のある方はぜひ来年度の参

加者としてお待ちしております。以上になります。

山 本： 村山さんご報告ありがとうございました。では続いて次の議題に移ります。

次の議題について、私山本のほうから JICA で NGO をはじめ関係各団体の皆さまとご一緒させていただいている 3 つの協力形態について簡単にご報告・説明させていただきます。

まず 1 つ目が草の根技術協力事業という協力形態で、通常草の根と呼んでおります。年間の募集スケジュールは大体毎年 6 月に募集が始まり、11 月に応募を締め切り、年度末にあたる 3 月頃に結果通知をできるようにというスケジュールで毎年進めております。

また、今年も 6 月頃に次年度の募集要項が出ると思いますので、ご検討いただければと思います。

草の根の 3 つの事業形態について簡単にご説明しますと、支援型は事業期間が 3 年以内で金額の上限が 1000 万円以内の、どちらかというと開発途上国への支援実績が少ない団体向けの協力形態になります。

一方でパートナー型は、豊富な実績をお持ちの団体さん向けの形態になりまして、実施期間が 3 年以内で金額の上限が 1 億円という大きい規模のものになっております。

3 番目の形態、本日、基礎自治体の方はご参加されていないと思いますが、ご参考までに紹介させていただくと、地域活性型という地方公共団体向けの協力形態もございまして、こちらも 3 年以内で金額の上限が 6000 万円ということになっております。

ここ最近の愛知、静岡、三重、岐阜県で採択された案件を抽出してここに掲載しています。現在、今年度分はまだ引き続き審査中なので、まだ結果が出ておりませんが、昨年度についてはモンゴルとメキシコを 1 件ずつ採択しております。モンゴルの方は国立大学法人東海国立大学機構（名古屋大学）さんが現在実施されております。メキシコの方は名古屋市上下水道局が実施されています。

続いて、もう一つ別の形態が NGO 等提案型プログラムという形態になっております。先ほど村山さんからご紹介いただいた NGO 研修もこちらのスキームをご活用いただいています。毎年 7 月ぐらいに公示されておまして、大体、年内に結果通知が出るという協力形態になっております。

こちらは途上国向けの事業を実施するというよりは、こちらに記載のとおり NGO 等の組織基盤強化に資する協力として実施いただいているものになります。大体、協力期間は最大 3 年以内で金額の上限が 1,500 万円という形態になっております。

こちら、今年度は採択がなかったのですが、昨年度の採択分として先ほど村山さんにご紹介いただいた NGO 研修を現在実施しているところです。

最後に、もう一つご紹介させていただくのが JICA 基金になりまして、こちらはちょうど現在公募中になります。応募締め切りが 4 月 25 日になりますので、募集要項を見てご関心を持っていただいた団体の方は、ぜひご応募いただければと思います。

こちらの活用事例を私の後に SHIZULATINOS のアントニさんからご紹介いただく予定ですので、ぜひお聞き下さい。

愛知・静岡・三重・岐阜県分でも多くの案件が採択されておりまして、今年度だけでもこちらに記載の 6 件が採択されています。NPO・NGO だけではなく、磐田国際交流協会さんのような一般社団法人にもご活用いただいております。募集要項の QR コードはこちらのとおりです。ぜひ後ほどご覧下さい。

では続いて、JICA 基金の活用事例です。浜松からお越しいただいているアントニさんにバトンタッチいたします。よろしくお願いいたします。

アントニ： ご紹介いただきました SHIZULATINOS のアントニと申します。名前は長いのでぜひアントニで覚えて下さい。

今、ご説明があった通り、JICA 基金に採択していただきまして、未来インベスト事業というものを立ち上げ実施させていただきました。未来インベスト事業がどういった内容をしていくかについて説明いたします。

まずマインドとして未来への投資、外国人の日本社会への参加。特に学生にどんどん夢を追っていただき、進学や就職という方法を使って、日本の社会にどんどん溶け込んでいただく。そして自分の夢の実現とともに日本をもっと良くしていくというマインドで実施しております。

どうしてこの事業が生まれたかというお話をさせていただきます。私が活動させていただいてるのが主に静岡県の西部の浜松・磐田・湖西です。そちらでは外国人家庭において産業構造の関係上、保護者の雇用形態が派遣社員やパート、期間工社員など、非常に不安定なケースが多いです。

また、言語の問題も重なり、外国人が多くいるからこそ、日本語の向上がなかなかできないとか、通訳が行政機関など様々な場所にいるために日本語の向上ができないことがあります。そうした問題が重なり、子どもたちに進学の実選択肢があったとしても、その手段を知らない、もしくは金銭的な問題で行けない、もしくは親の協力を得られず夢を諦めてしまう。これは本当にもったいないことで、せめて可能性を知っていただいて、視野を広げて、この事業として信頼できる情報やきちんとした情報の提供を試したことが、この未来インベスト事業が生まれた理由になります。

かつこよく言うところの理由になります。もともと小さなところから生まれていて、私が個人的に外国人から様々な相談を受けたり、何かできないかな、何か協力できないかなとずっと考えておりましたが、自分一人の力ではなかなかで

きないものです。その時に浜松の JICA デスクに JICA 基金のお話をさせていただいて、こうした協力を得て一緒にできたら、より多くの人に届けられるのではという思いで、提案書を書かせていただき、ありがたいことに採択していただきました。

目的はキャリアセミナーや進学に関する情報支援などを通じて外国人の子どもや外国にルーツを持つ子どもたちの進学およびキャリアの形成につなげることです。

今回、この事業として当団体だけでなく行政機関や民間企業、法人団体、外国人事業主、教育機関など多くの関係者からご理解、協力を得て、みんなでこういった事業を作っていく。この事業を作った責任者として、よい発言かどうか分かっていけるのですが、この事業がなくなったとしても、私の手から離れたとしても、こうした動きが広がって行って、より多くの人たちに支援が届けるようにできたらいいなと思っております。

こうした数字を様々書いてあるんですけども、私個人の考えとしては、未来の選択を一言で「じゃあ決めましょう」とするのはとても難しいことで、この中にいろんな協力、仮に進学を目的とした場合、人と人のつながり、他の人の情報が入ったり、他の人の成功事例を知ることによって自分も勇気づけられたり。

さらにその 5 割を情報が占めていると思います。情報がないと結局どうしたらよいかわからないですし、実際にセミナーに参加された方々は「知らなかった」「本当に参加してよかった」「知ってよかった」「こんな制度あったんだ」という感想が最も多く、目立ったと思います。

その後、10%ほど学費という情報にも結びつきます。教育ローンや国の教育ローンなど、お金を貸してもらえる制度を知らない。だから自分で年間 100 万、200 万円を払わなければならない、それは無理だということで諦めてしまうケースもあります。

実際にこのセミナーに来ていただいた大学さん等々には様々な制度があります。お金を借りるだけではなく、学校や行政からの支援など、こうした情報が沢山ありますので、行政機関や大学との連携で情報提供をしていただくことで制度を知り、未来の可能性が広がるのではと思います。

今回の事業の柱として、3 つの部分を置かせていただいています。

まず大型セミナーです。こちらは事業年間を通して 2 回実施させていただきました。2 回とも浜松市で実施しております。関係者を含む合計 150 人以上が参加しています。

実際に参加した大学、専門学校は書いてある通りです。

それとは別で個別相談という枠も設けました。セミナーでは一般的なお話しかできず情報を一方的に投げることになります。それ以外にきちんと参加者の悩み

を受け止めるためです。ただし、人によって知りたいこと・必要としている情報が異なるので個別相談という形で、その場できちんとした情報提供や悩みの解決ができればとして設けています。

実質は年間計 19 回ぐらい実施しております。年間計画としては 16 回実施。1 回あたり 4 つの相談枠が 16 回で 52 回の相談枠を実施しております。

この個別相談の認知が広まり、県外の方から実際にお話を聞いていただきたい、教えていただきたいというお問い合わせがありました。しかし、対面だと難しいこともあり、オンラインの相談枠を増やして対応いたしました。

最後に、この国の教育ローンを私どもでは実施していませんが、外国人がアクセスしやすいという点では、こちらのローンが使いやすいです。派遣社員でも借りやすいものになっております。経歴や情報の下で審査されますが、一般的にきちんとした生活と仕事をしていれば比較的受かりやすいようになっています。

実際、この 2 月 20 日に個人的な理由で教育ローン浜松支店を訪問させていただきました。そこで数件ほどセミナー経由での来店・申し込みがあったという報告を受けました。

実際に誰ですかとか何人ですかと尋ねたのですが、個人情報なので教えることができないと言われました。ただ、数件そうした申し込みがあったという報告をいただきました。少しずつではありますが、実際の成果を確認することができました。

では最後にセミナーの様子を短編動画でまとめましたのでぜひご覧ください。

ありがとうございます。このようにたくさんの応援メッセージでしたけれども、断片的にまとめさせていただきました。私の方からの発表は以上になります。ありがとうございました。

山 本： アントニさんありがとうございました。

続いて報告事項 5 番目になります。今年度実施されました多文化共生パートナー育成講座について、木村さんの方から参加者アンケートのまとめについて、ご報告いただきます。よろしくお願いします。

木 村： 皆さんこんばんは。JICA 愛知デスクの木村と申します。私の方から今年度の多文化共生パートナー育成講座の実施報告と参加者のアンケート結果についてご報告をさせていただきます。

まずこちらに概要を記載させていただいております。多文化共生をテーマとした名古屋 NGO センターさんと東海社会市民ネットワークさん、JICA 中部との連携事業は 2021 年度から実施しています。

翌年、2022 年度からはユースを対象に多文化共生における現状や課題を理解していただき、参加者が自分にできるアクションを実践していくということで実施をしております。

今年度で3回目です。実施体制はこちらに記載の通りです。主催団体さんや協力団体さん、過年度の受講者の希望者からなるコアグループで講座の企画運営をしていることも特徴の一つだと考えています。

今回、広報や本講座の中でもコアグループの、特にユースの方々にもファシリテーターとして活躍をしていただいております。

本年度の内容はこちらに記載のとおりです。

こちらの講座は全3回。基本的に全て出ていただくことになっております。昨年度まではマイクロアグレッションをテーマにしておりましたが、本年度はそちらに加えてビロギング、皆さんが居場所を感じ活躍できる社会をテーマに多文化共生について考えています。

第1回目はこちらの平山先生に総合司会をしていただいて、ワークショップを通じて自己を振り返り、マイクロアグレッションについて理解をしました。

その後、愛知県立大学の松宮教授に「日本社会と日系南米人」というテーマでお話をさせていただきました。松宮先生のフィールドワークの経験から見えてきた現状や課題を多面的にお話しいただきまして、日系南米人をはじめとする外国人の抱える現状や課題の理解を深めることができました。

第2回は豊田市の保見団地を訪問し、保見団地で活動されているJUNTOSさんの活動の様子を見学させていただいたり、日系ブラジル人の若者ですとか、介護事業を行っている方々と交流し、お話を聞かせていただいております。

そして第3回、最後の回ではこれまでの講座の振り返りをしました。その後、中京大学の教員のメリサンダさんにメインファシリテーターをしていただいて、ビロギングについて考えるという内容で実施しました。最後にそれぞれが自分にできるアクションを考えて発表するという内容で実施しました。

続きまして、アンケートの結果です。私からは参加者へのアンケートの報告をいたします。この後、NGOセンターの中島さんからコアメンバーへのアンケートの結果を報告いたします。

最後の3回目の参加者が20名でした。回答者が22名ということでコアグループの方もおそらく2人ほど回答していただいたと思います。回答率が100%を超えてしまいましたが、本講座の満足度としては平均が4.5ということで高評価を得ています。

理由としましては、ワークショップやディスカッションを多く取り入れていることもあり、様々な参加者との議論ができたことと、それを通じて新しい考え方や視野が広がったという意見が多かったです。

この講座での共通認識やアクションプランのレベル感、またディスカッションの前提の共有などがあればより深い議論ができたのではといったコメントもございました。

特に印象に残ったことが現地訪問という意見もありましたし、アクションプランの話が盛り上がったという意見もあり、アクションプランについて挙げている方が多かったのも特徴であると思いました。

本講座を紹介したいかという設問に、大多数の方からぜひ紹介したいと回答をいただいています。様々なユースを対象にしている、先ほどの満足度の理由と重なるところが多いのですが、「はい」の理由は、新しい知識を得られることや、多様な年代の方が参加していて、そうした方々と話すことが楽しかったという意見をいただいております。

また、「いいえ」の理由は、全3回の講座に全て出いただくこともあるため、「もうちょっと入門編なら」ですとか、「社会人だとスケジュール的に厳しい」といった意見がありました。「興味がある友達が近くにいない」という意見もございました。

今後、実際に活動していくかという質問では1名を除いて皆さん「はい」と答えていただいております。

どういう活動をしていきたいかはこの下に記載しています。日本語教室や子ども食堂でボランティアをしたいとか、国際交流コミュニティの設立やイベントの開催などが上がっておりました。

今回こうした実践につなげるために、3回まででこの講座としては区切りがついておりますが、第4回、第5回と継続の実施を予定しています。

現在、受講者の中で継続して参加する希望者を募っていて、5名の方が参加を予定しています。

セミナーの実施方法、セミナーをどこで知ったかという質問に対しての答えは、3回でちょうどいいという方が大多数を占めています。

セミナーをどこで知ったかは、今回コアメンバーの方々に大学やゼミや学校で紹介していただいたことが大きかったと思います。そうした方に最も多く参加していただきました。

チラシについて、こちらの設問は複数回答ですが、チラシがゼロということで、若い方を対象にしていることもあるので、広報の仕方を検討する必要もあると思っています。

アンケートの選択肢についてですが、JICAからのお知らせについてもメルマガやチラシなど様々なツールがあるので、選択肢についての検討も必要と思っています。

最後に皆さんに関心のあるテーマをお伺いしましたところ、多文化共生や外国にルーツを持つ子どもへの支援が多かったです。その中でも日本以外の多文化共生に関する事例を知りたいという意見もございました。

最後にまとめですが、参加者の満足度は前回同様とても高いと思います。昨年

度、新規の参加者獲得という課題がありましたが、グループの方々の広報のおかげで参加者は増えております。

今後の課題で、アクションにつなげるところはもう少し働きかけが必要なかなと思っております。ただ、今後第4回、第5回とあるので、ゆっくりと皆さんの希望を聞きながらフォローしていきたいと思っています。

また、本講座は今年度で3回目ということもあります。過年度受講者への実施状況のアンケートや、具体的なアクションの場を希望者に案内していく事も一案だと思っています。私からの報告は以上です。

山 本： 木村さんありがとうございます。続きまして、このまま名古屋 NGO センターの中島さんをお願いできればと思います。よろしくお願いいたします。

中 島： 名古屋 NGO センターの中島です。よろしくお願いいたします。

先ほど木村さんから参加者アンケートのまとめについてありましたので、私は木村さんも触れられたコアグループについて、その中でも特にユースのメンバーのアンケートのまとめを中心にお話したいと思います。

こちら、見ていただくと過去3年、2022年度からのコアグループの変遷ですが、特に構成としては海外ルーツの方がメンバーであり、多文化共生に取り組むNPOのメンバー、中間支援の名古屋 NGO センターのような立場の団体の関係者、それからユースという4つぐらいのカテゴリーの構成になっております。だんだんユースの方が7から11というふうに増えております。

また、先ほどありましたように、過去の参加者が次の年のコアグループのメンバーに組み込まれていくなど、ボランティアで参加していく形になっております。

課題としては、シニアの特に多文化共生のNPOの人たちや、中間支援のシニアの人たちがリードしていたところを、いかにユースの人たちにイニシアチブを渡していくかが課題となっております。

第1回はこのJICA 中部をお借りして交流会、ワークショップ、講演という形で進められていきました。参加者は30名。申し込みは38名あったんですけども、キャンセルが8名ありました。高校生は6、大学生17、社会人7という形で大学生が多くなっております。

グループファシリートのアンケート、大学生を中心にしたユースの人たちが15名おりまして、そのうちの11名の回答が得られております。

良かった点と改善点の2つに大きく分けています。それぞれプログラムや参加の度合いや参加者の様子、広報などにおいて、良かった点がいくつか挙げられております。

特に参加に関しましては、自分の考えをしっかりと共有していたことが印象に残っております。

改善点もいくつか出ております。ディスカッション・アクティビティの時間をもっと増やすこと、それから、講師の方には素晴らしい講演をしていただいたのですが、専門の講師の方からのインプットについては、基本情報の提供を自分たちで作成していくことも今後の課題となっています。

ファシリテーションに関しても、ユースの方はこれから特に勉強していきたいという意見が出ておりました。

第2回は今こちらにいらっしゃる **JUNTOS** の方々にお世話になったこと、それから保見団地の様子を実際に歩いて確認する、それから高齢者サービス、海外ルーツのユースとの交流会で **28** 名が参加しました。

こちらの良かった点は、他のメンバーと打ち解けられたことや、海外ルーツの方のプライベートな話もありますが、タイムラインというものを活用して深くお話をうかがうことができたということもありました。

全体として運営側の改善が必要な点として、時間が押し気味だったことです。

ここでは特に海外ルーツのビロンギングについても、意識してグループファシリテーターが話題を引っ張っていくことで提起し、ユースとの交流を持ちました。

特に保見の様子ですが、共助の関係がよくできているという印象があり、保見の南米ルーツの方々のコミュニティのことを理解することができました。

それから3回目ですが、保見団地訪問の振り返り、ビロンギングについての重要性、未来へのアクションということで全3回を終了した人たちが **20** 名になりました。

こちらでは特に一つの課題、ビロンギングについて熟考することができたことが良い点として挙げられています。そして、主体的に取り組むことができたことや、集中力を切らさずにできたことも挙げられています。

改善点では、アクションプランを考えるのが難しかったと。

もう一つは、**28** 名から **20** 名ということで、欠席者があったということ、これからその原因を分析しなければならないと思います。

目的の達成度について、2月18日に参加者9名で第10回のコアグループ会合を持ち、それぞれの目的の達成度を5点満点でつけてその理由も考えてみました。

第1回の講座目的1、交流会講義とワークショップにより、マイクロアグレッションについて理解し気づき、全ての人にとっての居場所や排除について考える5分の4という4点が挙げられていました。

特に何が排除に繋がるかが分かったこと、そして自分たちの経験に引き付けて理解できたのは、海外ルーツの人が一緒にグループの中にいたからということもありました。

次に、第1回の講座目的2がありました。日系ブラジル人コミュニティの歴史と現状課題、特に日本社会の制度的な問題との関連について知り、外国人の問題ではなく自分たちの問題でもあることに気付く、すべての人にとっての居場所や排除について考える、これは5分の3になっております。

特に講演の内容の情報量が多かったことで、現状の理解で精一杯であったこと、介護保険という若い人にとってはリアリティがない問題であった、もう一つは日本社会の制度的な問題との関連について知ることがあまりできなかったことなどが挙げられております。

そして、引き続き自分たちの問題として気づくという点に関して、ワークショップとの関連づけができると、自分たちの問題でもあることに気づくことができること。もう一つは人権問題として考えるときに公平公正につながべきである、という点が挙げられておりました。

第2回、今度は保見団地の方ですが、参加者が主体的・積極的に関わっていたことが挙げられています。南米ルーツのユースとの交流は、交流だけでなくテーマや構造につながることがもっとできると良かったと挙げてあります。総合的に5分の4ということになっております。

第3回講座の最後のまとめとアクションです。保見団地の理解・制度的構造的な問題との関わりは5分の4となっております。講座の振り返りを丁寧にしたことで、プログラムとして整理して次への流れができた、マインドマップがよくわからなかった、ファシリテーターの間で共通理解を持てるとよかった。

最後、第3回の講座目的の2です。アクションプランを作成することにおきまして、先ほど説明ありましたように、結果的にはネクストステップが4回目・5回目で達成すると考えれば、今回はアクションのヒントを得られたことで、ある程度できたのではということで5分の4になっております。

最終的な各講座の上の目的です。全体の目的として、橋渡し役の育成を通して海外ルーツの市民、日本の市民が互いの違いを尊重し、誰一人取り残されない、みんなが参加できる大きな場を作ることに貢献すること、これは5分の4になっています。

その理由は、各講座の達成度を先ほど評価してきたもの、そしてユースメンバーの成長ということで10人からの回答がありまして、コアグループ自体がピロギングのコミュニティであったと言えるとグループファシリのユースのメンバーが言っております。

そして、ファシリテーションを勉強していきたいという声も挙がっております。この3回の講座を通してユースメンバーが成長できた実感が得られたことも挙げられております。

今後についての提案は、さらにイニシアチブをユースに移行すること、コアグ

ループの勉強会でファシリテーションスキルと、共生社会の実現に向けての必要な知識の習得、そして 2025 年度の講座改善版とネクストステップの同時並行、保見団地の訪問に関して交流の対象の検討では、若い人たち、移民の人たちに焦点を当てたいと挙げております。

以上です。ありがとうございました。

山 本： 中島さん、ご報告ありがとうございました。

これで報告事項 5 つ全て終了いたしました。本来であれば、ここで質疑応答また意見交換の時間を十分に取りたいところなのですが、私の司会の不手際ですでに時間が押しておりまして、ここで一度予定通り休憩を 5 分取らせていただいで、この後セッション 3 の協議事項に移ってまいりたいと思います。

今の報告事項についての意見交換等は後ほどの時間で懇親会等もございしますので、その場でご報告された方々と活発に意見交換していただきたいと思います。

それでは休憩を今から 5 分間取らせていただきます。7 時 40 分にまたお席までお戻りいただければと思います。よろしくお願いいたします。

<休憩>

平 山： それでは第 3 部の協議事項を始めます。私、平山が改めて司会を務めます。どうぞよろしくお願いいたします。

第 3 部タイトルとして「コレクティブインパクトからプラットフォーム形成に向けて」と銘打っています。このタイトルのもとで皆様と議論したいこと、話したいことがございます。それは非営利団体であったり、公共機関であったり、企業さんであったり、市民の皆さんであったり、多様なステークホルダーのみなで共同して何かをやっていく、そうしたプラットフォームをどのように作っていきけるかを議論できればと思っています。そうした思いを込めてこのタイトルをつけています。

先ほどお伝えしたような共同のプラットフォームは、実はこの JICA 中部地域協議会の設立の趣旨として書き込まれていること、説明されていることでもあります。この協議会の設立の趣旨が設置の意義というタイトルの書類になりますが、オンラインで公開されています。「中部 NGO・JICA 中部地域協議会設置の意義」というタイトルでオンラインにて見ることができます。

そこに 1、2、3 という項目を書いておりますが、3 番として今皆さんにお見せしている「地域と世界をつなぐプラットフォーム」という項目がございます。ここを読んでいきますとこのように書いています。

「国際協力のアクターは近年、自治体、大学、企業など多様化し、地域に根差しながらも国際的な視野で身近な取り組みを行う「グローバル市民」も増えてい

る。また途上国での経験を日本の地域に活かしたり、その逆の取り組みも生まれ始めている。協議会は、そうした動きにも対応し、地域における国際協力の「プラットフォーム」としての役割を果たしていく」こういった説明がございます。

こうしたプラットフォームを作っていくのは、この協議会の一つの大きな目的でもございまして、それをどのように工夫しながら作っていけるのかを、この後話し合えたらと考えております。

それを考えるにあたって、参考とする事例の紹介をいたします。

事例の紹介としてお二方にお話をいただきます。

最初に、NPO 法人のホープインターナショナルの松浦さんから、NPO と企業の協業の事例についてご報告をいただきます。その後、名古屋グランパスエイトの佐藤さんから、名古屋グランパスでの多文化共生の取り組みについてお話をいただきます。

まず松浦さん、よろしくお願いいたします。

松 浦： 私の方から共同事例をお話ししたいと思います。

ホープインターナショナルの簡単な概要ですが、もともとカナダで発足された NGO です。日本では愛知県で 2001 年に発足された団体で、主に水支援ということで、水から始まる自立支援としてエチオピア、フィリピン、カナダで安全な水を供給するという事業をしています。

物を作るだけでなく、自立してこうした水環境・貧困環境から抜け出すといった事業を長年行ってきました。

こちらがミッション・ビジョン・バリューということで、私自身もエチオピアに駐在経験があります。

当団体の日本での役割は主にファンドレイジング＝資金調達になります。約 2 年前に日本の全 NGO の財源をある方が調べたところ大体 7 : 3 に近い 6 : 4 ぐらいで、委託も含めた助成金が 6 とか 7 というような割合です。ここにあるように寄付の割合が非常に少ないというデータが出ています。

ホープはもともとこの逆で 7 : 3 ほどで、財源については寄付の割合を増やしたいという創立者の意向がありますが、今は逆転して 7 : 3、6 : 4 ぐらいになっています。

私たちは外務省の N 連と呼ばれる助成金を使って長年エチオピアで 10 年間くらい活動をしてきました。しかし、去年からそれがなくなりました。7,000 万円ほどあったものが 1 年で一気になくなることはとても大きいので、寄付金、事業収入を増やしていこうという流れにあります。

私たちはカナダや欧米のやり方でこのチャリティーディナーを長年実施しています。実は、2 日後にヒルトン名古屋で 23 回目のチャリティーディナーを開催します。これがヒルトン名古屋の映像になります。チャリティーディナーの特徴は

楽しみながら寄付することやネットワーキングの場などです。特に名古屋は地元の企業さんが沢山いらっしゃるの、そのネットワーキングの場になっています。このようにインターナショナル、日本に住む外国人の方、経営者の方が集まっています。

こちらはエチオピア航空さんからいただいた航空券です。こういった商品提供もいろいろしていただいています。

今日、お話しするのはサイレントオークションについてです。

サイレントオークションというのは、このような机に物を置き、紙を置いて時間内に落札するシステムです。企業や個人から商品を提供いただき、それをオークションにかけて、落札したお金が全て事業収入として活動に充てられる仕組みです。

このように様々なものがあります。お酒や絵画、実はグランパスさんからも去年チケットをいただいています。面白いものだとお魚屋さんから12ヶ月間毎月違うマグロの部位がサブスクで送られてくるなど、そうした面白いものもあります。

こちらは日野菊商店といって、組飴やオリジナルの金太郎飴を製造する名古屋の企業です。名古屋でも様々な地元の企業さんや伝統工芸が参加しています。

オークションのメリットは、NPO側では低コストです。いただいた商品をオークションにかけてそれが支援金になる。

現在、日本の寄付額はだいたい1兆2,000億円ほどです。年間でその半分ぐらいがふるさと納税です。だから物を通した寄付の方が日本では親しみやすいのではということがあります。比較的、お金より物を通した寄付の方が、私の経験上は関わりやすいのではと思います。

それから、安く売れる。商品があっても皆すぐに分かります。携帯で調べれば定価が分かるので、大抵、安く落札されるという傾向があります。

また、企業側とすれば、お金より物やサービスのほうが提供しやすいのではというイメージがあります。様々な決済などの問題もあると思いますが、商品を知ってもら、サービスを知ってもらうという面でも、物のほうが提供しやすいのではと思います。

他には、イメージアップやブランディングのメリットもあると思います。

ということで、今日はグランパスの佐藤さんに来ていただいておりますので、この後、グランパスさんの取り組みをお話ししてもらう前に、昨年、素敵なペアチケットをサイレントオークションとして出品していただき、サイレントオークションに昨年参加いただいた企業側からどういったメリットがあったのかというお話を伺いたいと思います。佐藤さんよろしくお願いします。

平 山： 松浦さんありがとうございました。続けて名古屋グランパスの佐藤さんご報告

をお願いします。

佐 藤： 初めまして。名古屋グランパスの佐藤と申します。よろしくお願いいたします。

今、松浦さんからご紹介いただいた、昨年のサイレントオークションですが、我々としても先ほどおっしゃっていただいたネットワーキングの部分が一番大きかったと思います。

我々、名古屋の企業の方との接点はありますが、外国人の方や社会貢献に積極的な企業の方と普段つながれる機会が少ないです。

そうした中で我々はラグジュアリーなVIPシートのペアチケットとサイン入りのユニフォームを出させていただきました。そういったシートがあるということを経営の皆さんにお伝えできたことも大きいと思いますし、今年も連携予定ですので、同じような形で出させていただこうと思っています。

では続いて名古屋グランパスの多文化共生の取り組みをご説明いたします。改めて、弊社はホームタウンを名古屋市・豊田市・みよし市を中心として愛知県全県を活動拠点としているJリーグのサッカークラブになります。

また、トヨタ自動車様をはじめ、自動車関連企業や様々な名古屋財界の皆様にも支えていただいているクラブです。

昨年はルヴァンカップを獲得し、久しぶりにタイトルを取れたとともに、集客が56万2千人となり、クラブ記録を更新できました。多くの地域の皆さんに支えていただいた結果であり、日ごろのご支援に感謝しております。

まずはJリーグの理念からご説明します。豊かなスポーツ文化の振興のところが特徴的で、サッカーだけでなくスポーツ文化の発展や地域とともに発展することがJリーグの理念となっています。

そのJリーグは現在60チームもございまして、100年構想ということで「～スポーツで、もっと、幸せな国へ～」という理念も掲げて活動しております。

そんな中でグランパスのビジョンですが、まずは見て楽しいサッカーというのはもちろんのこと、我々としては「町いちばんのクラブ」を掲げて取り組んでおります。

満員のスタジアムを目指すことはサッカークラブとして当たり前のことですが、特に生活・日常の中で約750万人の方に誇りと思っただけのクラブにならなくてはならないと思っております。そしてサッカーをご活用いただきながら、地域づくり・町づくりに関わらせていただきたいという思いが強くございます。

私のホームタウングループの役割ですが、ホームタウンの社会課題にしっかり向き合う取り組みをしていく、さらには多様なステークホルダーとの連携でそれを推進していくことを考えておりまして、ホームタウン活動と呼んでいる地域

での活動を年間 373 回実施している状況です。

その中で愛知県の在留外国人の方、特にブラジルにルーツを持つ方が多いのですが、ブラジルルーツの方が日本での生活に様々なご苦勞をお聞きしますし、日本の社会との双方のコミュニケーションをスポーツセクターとしてできることをやっていきたいという思いで、2022～2023 年ぐらいから少しずつ多文化共生への取り組みを始めております。

最初はブラジルルーツの子どもたちのお仕事体験をスタジアムで実施しました。2023 年に事前のワークショップをして、試合会場で様々なお仕事を子どもたちに手伝っていただきました。試合当日のご案内をするためにポルトガル語と日本語の案内カードを日本人のボランティアさんとの事前ワークショップで作成しました。クラブハウスにお越しいただき、どんなワードが良いか一緒に考えながら作業しているところに練習を終えたブラジル人選手がサプライズで登場し、子どもたちもボランティアの方も盛り上がりました。試合当日はすでにやっていただく仕事や一緒にやる方もすでに分かっていることもあり、楽しく元気に仕事をさせていただいていたのが印象的でした。

この活動が J リーグのシャレンアウォーズ！においてソーシャルチャレンジャー賞をいただいたことも一つのきっかけになり、これをさらに発展させていこうと、昨年、SDGs アカデミーという取り組みの中で多文化共生のテーマを取り上げました。

グランパスはトップチームのプロ選手の他に U - 18 という高校生の選手をはじめ、中学生、小学生も含めたのプロを目指すアカデミーに所属する選手たちがいます。

そういった中で、U - 18 の高校生の選手にプロ選手になる前から社会の状況をよく知ってもらった上でプロ選手として活躍してもらおうと考えており、サッカー以外の部分を大事にしたい思いがクラブとしてございます。

U-18 選手と、クラブが連携している地元の自治体や企業の皆さん等との共創を通じ、ともに社会課題解決へ取り組むのが「SDGs アカデミー」という取り組みになります。

昨年は多文化共生をテーマに掲げました。ブラジル人キッズプロジェクトということで、実は我々はブラジル人が多く住んでおられる保見地区にアカデミーの拠点を持つという縁もあります。

いろんな方々にまずは話をお聞きしようと、本日お誘いいただいた松浦さんに非常にお世話になりながら、JICA さんと繋いでいただいたり、JUNTOS さんへ訪問もさせていただいて、様々なお話を聞かせていただきました。

そこで何が困りごとなのかを確認していきました。我々からするとブラジル人の子どもたちはリオのカーニバルのイメージで明るい子どもたちが多い勝手な印

象を持っていたのですが、意外とシャイな子どもたちが多く、自己肯定感を高く持てない子どもが多いというのを聞いて衝撃を受けました。お話を聞く中でスポーツとしてやれることは何なんだろうと考えました。

そんなブラジル人の子どもたちを中心に、地域社会との連携を深めるサポートをスポーツとして何かしていきたいと思いました。U-18 選手は高校生なので小・中学生のブラジル人の子たちからすると少し上のお兄ちゃんでもあり、何よりもブラジル人の子たちはサッカー好きなのでサッカーを生かした近い世代間での社会活動が良い形になるのではと思いました。

こうしたところに我々だけでなく、多様な方々を巻き込んでいくこともスポーツセクターとしての役割と考えました。様々なお話を聞かせていただいた、愛知県や豊田市の自治体にも関わっていただき、JICA さんや日本赤十字社愛知県支部さんにも来ていただきました。テレビ愛知さんは SDGs アカデミーを共催している仲間なのですが、良い取り組みだから一緒にやろうと言っていただけでした。

他には多文化共生リソースセンター東海の土井さんや、エスコーラ ネクターの山家さん等、本当に多くの方に教えていただき、課題を聞きながら一緒に進めていただくスタイルをとっています。

こんな形で去年はまず事務局だけのセッションをいたしました。その後、U-18 選手にも入ってもらい、4 回セッションをした後に 5 回目に実際に企画を実践し、最後に振り返りまで実施いたしました。

その様子はテレビ愛知さんの情報番組で毎月取り上げていただいたり、放送前ではありますがスポーツ SDGs の特番で取り上げていただく予定もしています。

イベント当日の様子ですが、まずインプットセッションで山家さんに講演とワークショップを実施いただき、ブラジルルーツの方の現状をお聞きしました。U-18 選手も練習しているすぐそばにそういう環境があることを知らなかったのも、まずはそこからでした。

そしてまずは交流してみようということで、ブラジル人の子どもたちとにトヨタスタジアムへ集まっていただき交流をしました。

山家さん中心にブラジル人の子どもたちをたくさん集めていただいたんですが、打ち解けも本当に早くて、すぐ仲良くなって翌週の U-18 の試合にブラジル人の子が見に来てくれたということもありました。

U-18 選手たちも何をすればよいか分からない所から、子どもたちに受け入れてもらったことも大きく、アイデアセッションではアイデアが非常に沢山出ました。

U-18 選手はプレミアリーグという大会で戦っていますが、その最終戦の東福岡高校とのホームゲームでの企画を U-18 選手自ら考え、ブラジルキッズを試合

に招待しました。エスコートキッズという選手が子どもと手を繋いで入場する企画に始まり、試合後はブラジル人の子がいつも食べているような好きな食べ物をランチとして用意し、ブラジル料理と一緒に食べる機会を作りました。その後、ミニサッカーゲームや運動会のイベントで盛り上がりました。本当に、兄弟のように盛り上がる感じが見て取れ、お互いにとても楽しそうでした。

今回、様々な組織の方に関わっていただくことで成し得たと思っていまして、U - 18 の選手にとっても、プロサッカー選手や社会人になる上で非常にいいきっかけになったと思っています。

実は今年も企画を進めております。今年はブラジル人の子どもたちに我々の舞台である試合会場へ来ていただきましたが、我々がブラジル人のコミュニティの方へ出向いたり、交流の枠を超えた子どもたちの日本語教育や、その先の進学など、もっと生活に近いところに何かスポーツとして貢献できる場所を探しながら取り組みたいと考えています。今後も U - 18 選手の取り組みのみならず、トップチームにはブラジル人のマテウス選手もおりますし、様々なリソースを活用いただきながら活動をしていきたいと思っています。

最後に、我々は外国人招待という企画を来月予定しておりまして、3月2日と29日の試合で在留カードを持ってきていただくで無料で入場できるという取り組みをしています。

最初はブラジル人招待から始まりまして、昨年初めて外国人全体の招待という形にさせていただき、昨年は9月の試合で34カ国964名にご来場いただきました。

今年も来月実施しますので、ぜひ皆様の周りの外国人の方にご紹介いただけたらと思います。いろんな形で外国人の方や地域の方とつながっていきたくてし、試合会場での日本人の方との交流も企画していきたいと思っています。

私からは以上となります。

平 山： 佐藤さんご報告ありがとうございました。

この後は意見交換に移りたいと思います。今、時間が8時5分。第3部の終了時間が8時25分です。あと20分ほど時間がございます。

今、ご報告いただいた佐藤さん、あと松浦さんにお聞きしたいことがあればどなたでも挙手をお願いいたします。

中島さん、よろしくお願いします。

中 島： 先ほど何が困りごとかを調べられたときに、ブラジルのルーツの子どもたちが思った以上に自己肯定感が持てないですとか、シャイだったり、色々あると思うのですが、どちらにヒアリングされたのでしょうか。どのようにお分かりになったのでしょうか。

佐 藤： 本当にいろいろですが、ブラジル人学校の先生方や、JUNTOS さんにもいろ

いろいろお聞きしました。ブラジルコミュニティの取材をよくされている NHK さんからも取材の中でそう思われたというお話も聞きました。

私たちも素人ながらこういう取り組みを始めたところで、我々のイメージと結構違う部分があったというのが最初の率直な感想です。

やはり日本語がしゃべれないことで日本文化に入りにくいこともあるそうで、山家さんを通じてブラジルの方が日本社会で感じていることを、実践を通したワークショップをしていただきました。

中 島： 来年度、引き続き取り組まれることの中で、どのようにして自己肯定感を高めるかという、対策等あれば教えていただけますか。

佐 藤： まだそこまで私たちも行き着けていない部分はありますが、いきなり日本語勉強しようよと言っても難しかったりするので、スポーツの楽しいところで引っ張り出してあげるなど、それが良いかわからないので、しっかりとニーズをお聞きしながら取り組みたいです。また、日本の情報が少ないこともすごく印象的でして、スポーツでブラジル人の子たち出てきてもらい、そこで情報を共有して気づいてもらうとかでしょうか。

あとはトップチームの選手たちがいますので、マテウス選手等に以前もブラジル人の子どもたちの前へ立ってもらったのですが、目の輝き方が違うと思いますので、そのような場面も作れたらと思います

通訳が日系ブラジル人の方なのですが、その方も今度、日本赤十字社愛知県支部さんの講演で登壇してもらう予定です。日本のコミュニティでの経験も経て通訳になったストーリーを話してもらうつもりです。自分の思いを選手や通訳に話してもらうことで、そんな社会もあることを子どもたちに知っていただくことも我々の役目だと思っています。

平 山： ありがとうございます。他の皆様、質問等ございますでしょうか。

では、藤井さんお願いいたします。

藤 井： お話ありがとうございます。名古屋グランパスの佐藤さんに質問です。多文化共生の取り組みを始めた後と終わってからでのユースの選手たちの変化をもう少し伺いたいです。

佐 藤： ありがとうございます。選手たちも多くの高校生と同じで、そうした社会課題があることを認識しておりませんでした。

本来は練習場の近くで暮らしているブラジル人の子たちの状況を知ったことでまず驚きがあり、次に交流を通して改めて日本人の子どもと同じでサッカーが好きで普通に遊べることに気づき、

違和感なく実際に交流ができたところで、さらにこんなことができるという発想でスポーツを通した企画が出てくるようになって、そんな自らの気づきが一番きっかけとして大きかったと思います。

こうしたことは U-18 選手だけでなく、スポーツを通して壁を越えられる部分があることは事務局として実感いたしました。

藤 井： その取り組みはサッカーのパフォーマンス自体には良い影響があったのでしょうか。

佐 藤： そこまではまだわかりませんが、交流した子どもたちが翌週の試合に応援に来てくれたことは大変嬉しく、選手たちもサインを求められたり、写真にも収まっていた。その点で大きなモチベーションになっていると思います。

藤 井： ありがとうございます。

平 山： ありがとうございます。他の皆様もご質問、聞きたいこと等あれば、お願いいたします。では、二角さんお願いいたします。

二 角： イカオ・アコの二角と申します。名古屋 NGO センターの支援団体です。ホープの松浦さんに質問させていただきたいです。サイレントオークションについて、資料の中で説明あったと思うのですが、日本の寄付の場合、物を通した寄付の方が、皆さんがやりやすいというので、とても素敵な取り組みだと思いました。

サイレントオークションをしようと思った時に、商品を提供してくださる企業の方が必要だと思うのですが、企業の方を探す時はもともとご縁や知り合いだった企業の方にスムーズにサイレントオークションに協力していただいたのか、営業ではないですが 1 から声かけをしてサポートしてくださる企業の方を増やしていったのか、どのように始められたのかお伺いできると嬉しいです。

松 浦： 8 割がつながりです。あとはピンポイントでこれが欲しいとか、例えばエチオピア航空さんはつながりがなかったので、つながりを作って、そこへたどり着きました。ほとんどはつながりだと思います。

今回は企業連携ということですが、団体にあるもので、オークションで出せるということはあると思います。

例えば、この話を昨年 3 回はいろいろなところで話をさせてもらいました。ひろしま NPO センターさんでお話しさせてもらったときに、環境学習をされている団体さんがうちもやりたいとおっしゃってくれました。そこはオオサンショウウオを放流しているらしく、放流したオオサンショウウオの命名権をオークションに出すとか面白いねというアイディアもでした。このオオサンショウウオにはマイクロチップを挿入されるので、生態がわかるので、落札した人も自分が命名したオオサンショウウオの生態がわかる。そういった命名権を 5,000 円でオークションにだしてみたら面白い。サイレントオークションはアイデア次第で何とでもなると思います。

平 山： ありがとうございます。他の皆様ございますでしょうか。

今の質問に関連して、司会特権で申し訳ないのですがお聞きしたいことがあ

ります。

つながりが大事なのはその通りだと思います。そこで、ホープさんとグランパスさんでそもそもどういう形でつながりができたのかを教えていただけたら嬉しいです。

佐 藤： 共通の知人のデザイナーさんを通して紹介いただいて、私は地域の皆さんとつながる仕事をしている中で、松浦さんが NGO をされていることをご紹介いただき、国際的な取り組みができるかなということであつないでいただきました。

平 山： 今質問したのは NGO 側で企業とつながっていきたい思いがあると思います。企業さん側でもそういうところがたくさんあると思うのですが、それが実際にどう噛み合うかはコネがすごく大事なんですけど、そこがうまくつながり合えば、今後より良い活動ができるかなと思ってお聞きしました。

佐 藤： 我々もたくさんのパートナー企業の皆さんに支えていただいています。ですので、我々もこうした社会連携の取り組みをしていくことでパートナー企業さんに我々の活動をサポートいただくことも大事と捉えています。

そうした意味ではグランパスをハブとして企業と皆さんがうまくつながれる取り組みを今後は目指していきたいこともあります。グランパスをうまく皆さんにご活用いただきたいので、今後も我々でよければ巻き込んでいただければと思います。

平 山： とても心強いお言葉です。ありがとうございます。

他の皆様、本当に何でも良いので質問ご意見あれば教えてください。では、杉井さんお願いいたします。

杉 井： 知立団地の方で活動しております、**One day One life** 杉井と申します。

アントニさんにお伺いしたいのですけれども、キャリア教育の中でセミナーや勉強会のような形で実施されたということですが、どれぐらいの規模で案内をかけたか、どれぐらいの人が来てくださったのかをお伺いしたいです。

私どもも一度キャリア教育を試みたのですが、知立団地にあるので、団地全体で声をかけてみましたが、キャリア教育となるとなかなか関心が薄いということがありました。それでもたくさんの方が来てくださったのですが、規模からすると少なかったです。

それで、最終どれくらいいらっしゃったのかというのと、もう一つ、キャリア教育は高校生、大学生関係なく実施したのでしょうか、お願いいたします。

アントニ： まず、チラシは第 1 回の時には各 4 言語、スペイン語、日本語、ポルトガル語、英語の 4 言語で 1,500 部ずつ、その後少し足りなくなったためもう 1,500 部刷ったので合計で 7,500 部ぐらい配布しました。かなりの量ですが、最初どう広報しようか、どうやって来てもらおうかというところで、第一の課題として人が集まらないとそもそも成り立たないところがありました。

どうしようかと考えたときに、教育委員会を巻き込もうと考え、支援をしていただいた JICA 浜松デスクの方と直談判のように実際にアポを取り、教育委員会さんとお話しさせていただきました。

今回、大学、専門学校のお話だったので高校生がメインかと思うかもしれませんが、最初に行ったのが市の教育委員会というのが中学校、小学校向けのものになるので高校生だけではなくて若い生徒、例えば高2の方で成績が難しいとか日本語が難しいという子どもが来ても、1年ではなかなか難しいけれど、ただ無理ではないということを知っていただきたいのです。

もっと早い段階から大学入学するのに実はこれだけお金がかかるよ、これだけ難しいことだよとか、これだけはしなきゃいけないよということを知っていただきたいので、最初、高校生に絞ろうかと思ったのですが、そこを限定せずに幅広く市内近隣の町の全ての小学校、中学校、県の教育委員会にお願いして外国人が多く在学している高校にもチラシを送らせていただきました。

チラシをたくさん送り、いろんなところでお話もさせていただき、実際のセミナーでは100人を想定して会場等を準備しました。最終的に70-80名近くだったと思います。目標には少し届かずでしたが、沢山の方に来ていただいたと思います。

また、チラシだけではなく、外国人の皆様が読む雑誌、日本で言うとラティーナさんや、現在はネット記事だけ上げているブラジルのインターナショナルプレイスの新聞にもお願いして載せていただきました。

正直なところと言うと、チラシよりネット記事の方がレスポンスがたくさんありました。特にインターナショナルプレイスさんに記事を上げていただいた時、静岡県、愛知県ではなく栃木県、群馬県、東京都、神奈川県など全国から問い合わせが来ました。

この時はオンラインの同時配信を整えていなかったもので、対面でぜひ来てくださいのご案内させていただきました。その結果、対面は難しかったということがありました。ただ、レスポンスは強く感じたというのが実質です。

チラシはチラシの大切さがあると思います。その時には具体的な成果はなかったのですが、後になってからチラシを見て連絡しましたという方々も結構いらっしゃいました。参加者の外国人の親子だけではなく、関係者の方々に少しずつですが私が住む市のNGOさんや、NPOさん等、一緒に何かできないかという連絡を少しずついただくようになりました。それは、チラシがいろんなところにあったからこそと思っています。

2つ目の質問ですが、実際にセミナーの時には小学校、中学校、高校、学生ではなく働いている大学生の年代の子にも来ていただきました。

国内ではなく海外の大学で海外の教育ローン等を借りられないか、という相談

もありました。そういう話をどこにすればよいか分からなかったのので来てよかったとのご意見もありました。その後、実際に相談ブースで教育ローンさんにお話されておりましたので、やっぱり絞らなくてよかったな、というのは正直な感想です。

第2回目の時にも幅広い年齢のお子さんたち、学生さんたちに来ていただきました。

平 山： ありがとうございます。第2部の報告事項についてのご質問も含めて受け付けたいと思います。

ステークホルダー間の協業、共同をどう作っていくかという話でもあったと思います。それは学校や教育委員会、ローカルメディアなどです。今の話は企業ではなかったですけど、様々なステークホルダーがどう繋がっていくかは、どんな活動でも大事なことだと思います。

アントニ： 企業さんにもご協力いただきました。派遣会社です。（資料に）派遣社員に問題があると書いたんですけど、一方で、派遣会社に在籍している外国籍の方が非常に多いので、いろんな派遣会社に紙とデジタルのチラシ両方を送らせていただきました。具体的にどれほど配っていただいたのか報告はいただけなかったのですが、配布はしていただきました。

平 山： そういう繋がるというのは大事なのかなと改めて思います。その点でどうやってつながっていくか、協働していくかについて質問やご意見あればお願いいたします。

坂 ： 名古屋 NGO センターの共同代表の坂と申します。私は名古屋 NGO センターだけでなく、キャンヘルプタイランドというタイを支援する団体も手伝っています。

キャンヘルプタイランドと名古屋グランパスさんの繋がりが何かないかと考えた時に、グランパスさんはタイのチェンマイでキャンプされてますよね。今年はどうでしょうか。

佐 藤： ここ数年は沖縄のみになっています。その頃はトヨタ モーター タイランドさんの支援をいただいて一時期チェンマイでやらせていただいた時期がありました。

坂 ： チェンマイに戻られる予定とかはありますか。

佐 藤： ご支援があつての活動になっておりましたので、すぐに戻れるかはわかりません。ただ、Jリーグはアジア戦略として、ビジネス的にもアジアへ出ていくことを今すごく活発にやっています。

我々も海外国際担当を置いて活動を始めていますので、社会貢献的なことや、ビジネス的にアジアのスポンサーの皆さんにご支援いただくことも含めて、アジア諸国との複合的なつながりを今後は作っていきたいと思っています。

坂： 偶然ですが、私どもはタイのチェンマイで山岳少数民族の学生寮を支援しております。今年チェンマイでキャンプをされるのであれば、そこ子どもたちをキャンプに招待していただけたらと思いました。そうした情報がありましたらまたよろしくお願いします。

平 山： ありがとうございます。司会が3分ほどオーバーをしてしまいました。申し訳ありません。

人と人とのつながりをどうやって作っていくかという事、協働が成り立ちますし、そうした協働のあり方の情報共有ですとか、ノウハウを皆で上手く共有していけるとより良いつながりを模索できると思いました。それを今後も関わる人間、みんなでそれぞれ努力して模索していければと思います。

それでは第3部の協議事項はこれでおしまいとします。皆さんありがとうございました。佐藤さんと松浦さんご報告ありがとうございました。

この後は閉会の挨拶に移ります。名古屋 NGO センターの代表理事の中島さんから閉会の挨拶をいただきます。

中 島： 2時間という非常に短い時間にたくさん詰め込みすぎた感じがコーディネーターとしては反省だと思います。

最後の協議時間をゆったりとって皆さんの意見をたくさんいただいたかったんですけども、このように十分な議論ができませんでした。

懇親会がこの後、JICA さんの呼びかけで実現しましたので、話し足りないところなどありましたら、交流もしっかりしつつ意見交換をしていただければと思います。

そもそも今回の協議のコレクティブインパクト、一つの NGO・NPO でできないことを JICA さんや企業、大学または自治体というような、多様なステークホルダーとの連携で相乗効果といいますか、広げていくことで、知立の **One day One life** の方も質問されていましたが、様々なところと連携することで、インパクトといいますか、参加者が増えたり、広がっていくことができるということが SHIZULATINOS さんの例でも分かったと思います。

また、グランパスさんをハブとして活用し、グランパスさんを支えているさまざまな企業と NPO・NGO の皆さんが更につながっていくような、大変ありがたいプラットフォームによる提案の励ましもありました。

そこへ JICA 中部や私たちも加わって、一つの目標に向かって取り組めたらいいなと思います。

私自身は先ほど紹介しました多文化共生パートナー育成講座の全体コーディネーターのようなことをしています。

今こちらにいらっしゃるメリサンダさん（通称：メラ）から教えられたことです。メラさんもコアグループメンバーに入っていて、今年のテーマ「ビロ

ンギング」というのもメラさんの提案でこのテーマになりました。メラさんは外国ルーツの視点から私たちに様々なアイデアや意見を言うてくださいました。

最近の小学校、中学校では人権週間というものがあるんですが、「ただ誰々さんに優しくしましょうということで終わらせることではない」とメラさんが問題提起されました。そうではなくて、やはり人権週間というのは公平公正につながべきであろうとはっきりコアグループのミーティングで言うてくださった事が気づきとしてあります。多文化共生も外国ルーツの人の人権を考えることに繋いでいくべきだとまた思いました。私たちと同様に市民としての権利を外国ルーツの人たちも持つべきであろうと強く思わせられました。

今回、「ビロンギング」ということで「皆が居場所を感じ活躍できる社会」、「違いや魅力を感じながら皆が関わっている社会」を考えることがテーマでした。それはまた SDGs の 10 番目のゴールである「国内の格差をなくす」ことにも繋がっていくと思います。そのことは多文化共生を含む全ての人の人権が尊重される社会に繋がると思います。また、国と国との格差をなくすこともゴールの 10 で言われておりますが、「公平公正な貿易」というのもありますが、特に国際協力に関わる NGO の方もここにいらっしゃいます。また JICA はその両方に関わっているので、ここにいる私たちが JICA 中部さんと一緒に NGO・NPO・企業の方も同じ目標を持って、ともにビロンギングのある社会を作っていくことのきっかけに、今回の地域協議会がなればと願っております。

以上です。ありがとうございました。

平 山： 中島さんありがとうございました。

今回の第 19 回 JICA 中部地域協議会はこれでおしまいとしたいと思います。会場の皆様、そしてオンラインの皆様もご参加いただきありがとうございました。

一 同： ありがとうございました。